転生王子はダラけたい。7

TENSEIOJIHA DARAKETAI

朝比奈 和
Asahina Nagomu

登場人物

CHARACTER

ザクロ
岡っ引き口調の氷亀。
フィルの召喚獣。

ルリ
フィルの召喚獣の
ウォルガー。空を飛ぶ。

コクヨウ
ディアロスと呼ばれ、
恐れられる伝承の獣。
見た目に反して大の甘党。

ライラ
商家の娘で、レイの幼なじみ。
商魂たくましい。

レイ
女性好きで少し残念な、
フィルの同級生。

トーマ
フィルの同級生。
マイペースで動物好き。

テンガ
フィルの召喚獣の袋鼠。
空間移動の能力を持つ。

コハク
ポケットが大好きな
光鶏。体が光る。

ホタル
フィルの召喚獣の
毛玉猫。転がって
移動するのが好き。

ヒスイ
少女の姿をした精霊。
普段は穏やかな性格
だが、怒ると怖い。

カイル・グラバー
クールな美形少年。周の
妖精に好かれる蝙蝠の獣人。

アリス
フィルの幼なじみ。
賢くて機転が利く。

フィル・グレスハート
大学生・一ノ瀬陽翔（いちのせはると）が転生した
本編の主人公。目立たずに
ダラダラ過ごすのが夢。

1

ステア王国、ティリア王国、ドルガド王国。
この三国は隣接し合っているが、国の特色や国民性はかなり違う。
学問の国のステアは知性的で研究熱心な国民が多く、織物の国のティリアは個性的で器用、傭兵(ようへい)の国のドルガドは身体的に優れ忍耐強いという特徴を持つ。
そんな三国の友好と交流を目的に、『三国王立学校対抗戦』が始まったのが百五十年ほど前。開始以来、五年ごとに三国の王立学校中等部の生徒たちを競わせている。
なぜ高等部ではなく中等部の生徒なのかというと、対抗戦開催当時にはまだ高等部がなく、そのまま今日(こんにち)まで受け継がれてきたせいだ。
開催国は持ち回りで、今回はドルガド王国で開かれる。
そんな伝統ある対抗戦のステア王国代表メンバーに、俺――フィル・グレスハートと従者のカイル・グラバーは選ばれていた。
カイルは身体能力が高いし剣術に優れているから選ばれて当然なのだが、まさか俺も選手になるとは思わなかった。何せ、今まで十歳以下の生徒が選出された例がない。年齢や体力面で考えても、

俺の抜擢は異例なことだった。
三国王立学校対抗戦史上、最年少の代表かぁ。
学校ではグレスハート王国の王子だということを伏せ、平民のフィル・テイラと身分を偽っているから、あまり目立ちたくないのになぁ。下手したら身バレしそうだし。
あぁ、どうか無事に終わりますようにっ！

そんなことを祈りつつ、三国王立学校対抗戦は幕を開けた。
対抗戦は三日間あり、一日目は開会式と剣術戦、二日目と三日目は探索戦、閉会式は探索が終わった直後に行われる。
開会式は、ドルガド王立学校の敷地内にある闘技場で行われていた。
さすがは武道に力を入れているドルガド王立学校と言うべきか、頻繁に生徒同士での剣術大会が開かれるため、学校敷地内に闘技場がある。
観客収容人数は、およそ三千人。すり鉢状の構造で、観客席から闘技場全体が見下ろせるようになっていた。
その観客席は、貴賓席・学生席・一般市民席で分けられている。
正面中央に三国の学校長や王族のいる貴賓席があり、各学校の学生席の間に一般席を挟んでいる。
観客に見下ろされながら、俺たち対抗戦代表は学校ごとに縦に整列していた。

背の低い順に並んでいるので、一番小柄な俺は当然ステア王立学校代表の最前列だ。
さらに言えば、横にいるドルガドやティリアの最前列にいる女の子たちと比べても、最も小さかった。
俺が年下だからということもあるが、対抗戦代表者たちは平均より背が高く体格の立派な人が多い。年相応な体つきの俺が、体格比べで敵うわけがないのだ。
俺は悲しい気持ちになりながら、何気なく正面中央の貴賓席を見上げる。
ちょうどドルガド王国のディルグレッド・カルバン国王陛下が拡声鳥に触れ、対抗戦の開会式の祝辞を述べているところだった。
拡声鳥はその体に触れながら話すと、拡声器のように声を周りに響かせることができる。
闘技場内に響き渡るディルグレッド国王の声は、重みのある低音でとても威厳があった。
ティリアやステアは皇太子の列席なのに、ドルガドは国王自ら観覧かぁ。さすが開催国、対抗戦への気合いの入り方が違うな。
年齢は四十代半ばで、軍服に似た服装に長いマントを着用している。ドルガドの学生服も軍服に似た形をしているから、この国の正装はそういうタイプなのかもしれない。
ディルグレッド国王は、そんな軍人に似た出で立ちで眼光が鋭いのでかなり迫力がある。
不機嫌とまではいかないが、ずっと渋い表情をしているせいもあるだろう。
俺の位置からは少し離れているし、髭で口元が隠れているので定かではないが、一度も笑ってい

ないと思う。他の来賓と挨拶する時でさえもだ。
そう言えば、ゴードンさんも無愛想なタイプだったなぁ。
ゴードン・ベッカーさんは、世界に名の知れたドルガド王国が誇る名匠だ。名剣を打つことで有名だったそうだが、今は武器制作をやめて包丁や鍋などの日用品を作っている。俺が今回対抗戦の探索戦に持っていく鍋や包丁も、ゴードンさんから購入した品だ。
ゴードンさんは無愛想だったけど、見た目がドワーフみたいに小さくて中身もいい人だから、不機嫌さすらちょっと可愛い。ディルグレッド国王も、そうだといいなぁ。
そんなディルグレッド国王の後ろには、ドルガド王立学校中等部ゾイド・ブルーノ学校長が控えていた。年齢は国王と同じ、四十代半ばくらい。服装は同じ軍服タイプでも、装飾が殆どないとてもシンプルなものだった。
ブルーノ学校長は身長が高く、ドルガドの一般的な男性より細身で穏やかな風貌をしている。
シリルの話では、学校長になる前は戦で幾度も功績を上げた優れた武人だったらしい。顔に似合わぬ怪力の持ち主で、怪我をして第一線を退き学校長となった今でも、並みの騎士では敵わないという。
考えてみれば、あの血気盛んなドルガドの生徒たちをまとめているのだから、ただの穏やかな人じゃ学校長は務まらないのかもしれない。
俺はドルガド王国の貴賓席から、ティリア王国の貴賓席に目を向ける。

義兄のアンリ皇太子殿下と皇太子妃であるステラ姉さん、アルフォンス兄さんとティリア王立学校中等部のマリータ・リグネ学校長がいる。
アンリ義兄さんとステラ姉さんは、ジャケットとドレスを薄いブルーで合わせていた。時々囁き合って微笑んでいる姿を見ると、本当にお似合いの夫婦だ。
ただ、談笑しながらも、ステラ姉さんはアルフォンス兄さんの様子を気にしている。
俺が対抗戦に出ると聞きつけて、観戦に駆けつけたアルフォンス兄さん。ステラ姉さんにとっても俺にとっても、それは予想外の事態だった。
きっとステラ姉さん、アルフォンス兄さんがブラコンを駄々漏れさせないよう、監視してくれているんだろうなぁ。
そんな妹の気苦労を知らないのか、知っていてあえて気づかぬふりをしているのかはわからないが、アルフォンス兄さんの瞳は一心に俺へと向けられていた。
……アルフォンス兄さんの視線が熱い。
各校の代表が並んでいるから、俺だけを見ているとは思われないだろうけど、それにしたって見過ぎじゃないか。
俺は困りながらアルフォンス兄さんから視線をずらし、マリータ学校長を見た。
マリータ学校長は女性で、とても迫力のある美人だ。
レイから「長く学校長を務めているから、少なくとも五十は超えているはず」との情報を得てい

るが、とてもそうは見えない。
濃いめの化粧や色鮮やかな服からは、自分を見ろと言わんばかりの自信がみなぎっていた。
ティリア王立学校は、自分の個性を自由に表現させる方針だってこともレイは言ってたな。
確かに観戦しているティリアの生徒を見ると、全員が制服にアレンジを加えている。隣にいるティリアの代表メンバーも、運動服の襟や袖にリボンや飾り羽根などをつけていた。
そう言えば、ティリア側の宿泊テントも派手だったっけ。
色彩豊かなティリアの客席を見ながら、ティリアの宿泊テントを初めて見た時の衝撃を思い出す。
ティリアとステアの生徒たちは、ドルガド王立学校の敷地の一部を借りてテントを張っていた。
対抗戦は三国共同のお祭りでもあるから、観戦に来る保護者たちだけでなく、お祭りに参加する行商人や観光者も増える。そのためドルガドの宿屋はどこも満室で、生徒たちが泊まれないのだ。
幸いなのは、宿泊テントがとても快適なことだった。五人で一つのテントだが中はとても広いし、小さいながらも個々に簡易ベッドも入れられている。
さらにテント群の近くには、ドルガド側が用意してくれた屋台村もあって、ご飯やおやつがそこで食べられる。まるでキャンプに来ているみたいな楽しさなのだ。
そんな中で、一番驚いたのはティリアの宿泊テント群。
カラフルな色と、賑やかな装飾で飾られたそのテントの一群は、ひときわ異彩を放っていた。
あれを見た時、ドルガド側が娯楽にサーカス団でも呼んだのかと思ったんだよな。

個性的なものは見る分には面白いと思うが、俺はあそこまで自分の個性を主張できない。
やっぱり、ステア王立学校が一番俺の性に合ってる。
そうしみじみと思いながら、ステア王国の貴賓席へ視線を向けると、そこにはマイラス・デュラント皇太子殿下と、ステア王立学校中等部のシーバル・ゼイノス学校長が座っていた。
マイラス皇太子は、対抗戦ステア代表の副将であるライオネル・デュラント先輩のお父さんだ。
デュラント先輩の涼やかな目元と、聡明な雰囲気は父親譲りなのだろう。開会式が始まる前に挨拶をさせていただいたが、一見クールなのに笑うと優しい目元に変わるところもそっくりだった。
お会いできたことを喜んでいると、会話の中でとんでもないことが判明した。
デュラント先輩は実家のお城に帰るたび、家族に俺の話をしているらしい。
お風呂を作った話とか、こたつを設置した話とか、とにかく興味深い生徒なのだと語っているそうだ。
俺がグレスハート王国の王子であることは、テレーズ女王とゼイノス学校長は知っている。つまりは、俺の学校生活は女王陛下に筒抜けってことだよね？
そして当然、今回の対抗戦で起こったことも、マイラス皇太子とデュラント先輩からテレーズ女王に伝わるはずだ。
三国が会するこの対抗戦、本当に目立たないように気をつけよう。
俺は改めて、気を引き締めたのだった。

◇　◇　◇

開会式が無事に終わると、これから行われる剣術戦のため、代表者たちは闘技場内部にある各学校の選手控室へと移動を始めた。

最後尾にいたマクベアー先輩から歩き出したので、最前列だった俺はみんなの後ろについていく。その途中、俺はティリアの選手控室の前でふと足を止めた。

すごい。入り口が色とりどりの旗や花、リボンで飾り付けられている。

開会式が始まる前は、普通の入り口だったはずなのに。

ここは一般の生徒が入って来られる場所じゃないから、選手たちが飾り付けたのかな？

そう言えば、開会式の行進の時、ティリアだけ来るのが遅かった。

しかし、短時間でよくこれだけ飾り付けができたなぁ。

いついかなる時も美への意識は忘れない、ティリアの意地が垣間見える。

感心しながらきらびやかな控室入り口を見上げていると、その入り口のカーテンが開いて誰かが出てきた。

「この美しいリボンは、入り口に映える」

美しい光沢の青いリボンを見つめながら、その人は口の端に笑みを浮かべて呟いた。

この人は……ティリア王立学校の大将で三年のイルフォード・メイソンだ。

一昨日、三国の対抗戦メンバーが開示されたため、ステアの先輩方は各校代表者たちの情報収集をしてくれた。その後のミーティングにより、俺も他校選手の情報は頭に入っている。

イルフォードは絵画や彫刻で素晴らしい作品を生み出しており、彼自身が美少年ということもあってファンも多いらしい。最近の剣術大会には出ていないが、剣の腕前も相当だという話だ。

そんな彼の今の服装は、緑の運動着の左胸ポケットに白くて長い飾り羽根を差し、右肩にのみ紺碧の短いマントがついている。金髪の美形だから似合うが、とても派手な印象だった。

イルフォードの金色の長いまつ毛が上げられ、アクアブルーの瞳が俺を捉える。

やばい。目が合っちゃった。

「ステアの小さい子。……迷子？」

「え？」

尋ねられて前を見ると、先を歩いていたメンバーがいない。俺が一番後ろだったから、気づかずに行っちゃったのか。

「あ、いえ、迷子じゃないです。大丈夫です」

俺は頭を下げて、慌ててその場を離れようとした。

「待って」

呼び止められ、足を止めて振り返る。

「はい？　何でしょう？」
イルフォードはその問いに答えず、俺の真正面に立って上から下まで観察し、手に持っていたリボンを使って俺の首元で蝶結びにした。
え？　何？　どういうこと？　これって、入り口に映えるって言ってたリボンじゃないのか？
戸惑う俺をよそに、結び終えたリボンを整えてイルフォードは満足げに微笑む。
「うん。君の青みがかった銀髪に、青いリボンがよく映える」
「あのぅ……。これ、入り口の飾りじゃないんですか？」
「うん。でも君のほうが似合う」
にこにこと微笑むイルフォードに、俺は困惑する。
俺としては、運動着にリボンを結んでいるってかなり変な格好だと思う。だが、これだけ満足そうにされると、リボンを外して返すのは失礼な気が……。
どうしたらいいのっ！　誰か、答えをプリーズッ！
どう対応すべきか迷っているところへ、再びティリア控室のカーテンが開いて、メガネをかけた少年が勢いよく飛び出してきた。
「イルフォード先輩、リボンをつけるのにどれだけ時間かかってるんですか！　リボンより、試合前の最終確認しない……と」
言い終える前に、向かい合う俺とイルフォードを見て動きを止める。

彼は二年生で副将の、サイード・ウルバンだ。確か、ティリア代表メンバーの頭脳的存在だって聞いたな。
サイードの運動服は、アレンジを加えているティリアの選手の中では最も原型に近い。刺繍やボタンを変える程度で、奇抜さは全くなかった。
サイードはメガネをかけ直し、目を眇めて俺たちを見る。改めて、見間違いじゃないのかと再確認したようだ。サイードは訝しげな顔で尋ねる。
「何やってるんですか？」
「リボンを結んであげたところ」
イルフォードの返事を聞き、サイードはこめかみを押さえた。
「そんなの見たらわかりますよ。何でリボンを結ぶことになったのかって聞いてるんです」
脱力気味に言うサイードの背中に、一人の女の子が飛びついた。ツインテールの髪にリボンをつけ、運動服をフリルやリボンで可愛らしく飾った少女だ。
えっと、確か……二年のリン・ハワード。ドルガド出身で、中等部からティリアに留学した子らしい。可愛らしい見かけによらず、武道に秀でているという。
リンはサイードの背に乗っかりながら、得意げに言った。
「サイちゃん、そんなのもわからないの？　決まってるじゃない。この少年にリボンが似合うからよ。サイちゃんって、本当にセンスないんだから」

「リン、突然飛びつくなよ、危ないだろ。悪かったな、センスなくて」
サイードが体を揺すり、背中に乗ったリンを振り落とす。
リンはサイードに向かって舌を出すと、今度はイルフォードに向きなおりにっこりと微笑んだ。
「それにしても、イル先輩さすがですっ！　そのリボンはこの子にピッタリですよ！　もうこれ以外ないって感じです！」
力強く言うリンに、イルフォードは嬉しそうに微笑む。
「だよね」
ピッタリ……なのかな？　よくわからないが、とりあえず似合ってるってことか？
「えっと、ありがとうございま……す？」
疑問符をつけながらお礼を言った俺の頭を、イルフォードが優しく撫でる。その様子を見て、サイードとリンは「あーっ!!」と声を揃えて叫んだ。
「ちょっとちょっとちょっと！　イルフォード先輩！　いくら可愛いからって、他の学校の子の頭、気安く撫でちゃいかんでしょう！」
サイードがイルフォードの手を掴むと、リンはすかさずその掴まれた手に頭をもぐりこませた。
「イル先輩、そうですよ。他校の子より、可愛い後輩である私たちを撫でてください！」
「？　……わかった」
イルフォードは首を傾げつつ、リンとサイードの頭を撫でる。

「違っ……もぉぉ、俺が言いたいのはそういう意味じゃなくてぇぇぇ！　リンも変なこと言うなよ」
サイードは脱力して、イルフォードの手をのけた。それから、俺に向き直り軽く頭を下げる。
「ごめん、フィル・テイラ君。イルフォード先輩は、ちょっと……いや、かなり変わってる人だけど、悪気はないから」
目の前で繰り広げられるボケとツッコミに噴き出しそうになっていた俺は、名前を呼ばれて驚く。
最年少で俺が目立つせいもあるだろうが、ティリアも当然こちらのことを調べているわけか。
俺はサイードに向かって、にっこりと微笑んだ。
「ええ、わかっています」
不思議な人ではあるが、イルフォードから悪意のようなものは感じられなかった。
俺の返答に、サイードはホッと息を吐く。
「そろそろステアの控室に戻ったほうがいい。多分心配してるよ」
そうだな。あまり遅くなったら、本当に迷子になったと思われそうだ。
「そうします。あ……そうだ。このリボンはどうしたら……」
首元のリボンを指さすと、イルフォードは柔らかな表情で言う。
「あげる」
そんなイルフォードをチラリと見たサイードは、困った顔をした。

「えっと……良かったら貰ってあげて。あとで外してもいいから」
これほど光沢のあるリボンは相当高級な品ではないかと思うが、似合うと言ってわざわざつけてくれたのだから、遠慮しては反対に失礼に当たるかもしれない。
「どうもありがとうございます」
俺は頭を下げてお礼を言い、小走りでステアの控室に向かった。

ステアの控室に戻ると、カイルが慌てて俺に駆け寄る。
「何かあったんですか？」
「気づいたらいなかったから、迷子になったのかと思ったよ」
安堵の息を吐くデュラント先輩たちに、俺は深々と頭を下げる。
「本当にすみません。ティリアの入り口の装飾がすごかったので、足を止めちゃいまして……」
「確かにあの装飾はすごかったよね」
そう言ったシリルが、ふと俺の首元に視線を止める。
「どうしたの？　そのリボン」
「あ……えと、ティリアの大将が、僕に似合うからってくれた」
俺が口ごもりつつ言うと、皆はポカンとした後に噴き出した。
「確かに似合ってて可愛いわね」

「ええ、お人形さんみたい」
クロエ先輩とサラ先輩はよほど可笑しいのか、ふるふると体を震わせている。
俺だってこのリボンはどうかと思うけどさ、何もそんなに笑わなくても。
少し拗ねた気持ちになっていると、デュラント先輩は感嘆の息を吐いた。
「短い時間で、あのイルフォード・メイソンに気に入られるとは、さすがフィル君だね」
「『あの』って、どういうことですか？」
首を傾げる俺に、デュラント先輩は苦笑する。
「彼には彼だけの世界があって、その世界に入ることができるのは、ごく限られた者だけという話だ。それ以外の者には、必要最低限の会話しか返さないそうだよ」
へぇ、そんな気難しいタイプには見えなかったけどなぁ。
俺は頭を触って、先ほど撫でられた優しい手の感触を思い返す。
「フィルが戻ってくる少し前に知らせがきたのだが、剣術戦の一試合目はそのティリアに決まった」
マクベアー先輩の言葉を聞いて、俺は少し安堵した。
初戦は緊張で体が硬くなりやすいから、ドルガドでなくて良かったと思ったのだ。
ティリアにももちろん勝ちたいが、ドルガドには負けるわけにはいかない理由がある。
ドルガド代表のディーン・オルコットと、とある賭けをしてしまったせいだ。

ディーンはステア代表にいるシリル・オルコットの兄で、武道に秀でている少年だ。
シリルにとって尊敬する兄であり、コンプレックスの元でもあった。
兄からの叱咤激励に委縮するようになり、剣術の試合で勝てなくなってしまったのだ。
自信をなくしたシリルは、さらに負け続けるという悪循環に陥った。
シリルのお父さんはそれに気がつき、シリルにステア王立学校中等部への留学を勧めた。剣術担当であるワルズ先生が、シリルに合った戦い方を教えてくれると考えたからだ。
しかしディーンの目には、留学することでシリルが剣の道から逃げたように映ったらしい。
ディーンがシリルの留学継続を認める条件は、この剣術戦でステアの剣術がドルガドよりも勝っていると証明すること。
それができなければシリルをドルガドに呼び戻し、再度自分が弱い精神を鍛え直すという。
これはシリルのお父さんは関知していないことだから、絶対的な執行力はない。だが、シリルの選択が間違っていないことを証明するためにも、ステアは勝たなくてはならなかった。
「いよいよ剣術戦か。どんな相手と戦うか楽しみだな」
マクベアー先輩は好戦的な瞳で笑い、パンッと自分の手のひらに拳を当てる。
そんなマクベアー先輩を見て、俺はいよいよ対抗戦が始まるのだと実感した。

◇　◇　◇

それから半刻ほど経った頃、ステアとティリアの代表は再び闘技場へやってきた。
次の試合の参考となってしまうため、ドルガド代表はステアやティリアの試合を観戦することができない。
闘技場中央にはロープで四角く枠が引かれ、それを挟んで向かい合う形でベンチが置かれていた。
それぞれのベンチに、ステアとティリアの代表選手が腰掛ける。
間近で観戦できるこのベンチは、最も迫力が感じられる特等席だ。
ステアの剣術選手は、マクベアー先輩とクロエ先輩とカイル。
ティリアの剣術選手は、先ほど会ったイルフォードとリン、それから二年のルパート・ペルンという少年だった。
ルパートは半年前に子供剣術大会に出場し、成績は三回戦止まりだったそうだ。
その試合を観戦したマクベアー先輩の話では、中の上といった腕前らしい。
このように、対抗戦では過去に相手が出場した大会の成績や戦い方が参考になる。
ただ、イルフォードとリンは、ここ数年公式の剣術大会に出場していなかった。
最後に出場した時の成績は、イルフォードが四年前の子供剣術大会五位、リンが三年前の女子子供剣術大会優勝だという。
そこまで前の成績だと、どれくらい強くなっているのか、あるいは大して伸びていないのか、な

かなか判断の難しいところだ。
まぁ、うちにも剣術大会未経験のカイルがいるから、ティリア側も推し量りきれないだろう。
なんにしても、代表者に選ばれているくらいだ。どの相手も油断するべきではない。
剣術戦のルールは、いくつかあった。

1. 武器は木製の、模造の剣を使うこと。
2. 剣術と併用した体術は、使用してもよいものとする。
3. 召喚獣は使用しないこと。
4. 試合開始から終了までの間、対戦している者以外の第三者の介入、もしくはほう助があった場合、その試合のみならずチーム全体が敗戦となる。
5. 頭部や急所への攻撃は寸前で止めること。寸止めとなった時点で、勝負ありとする。
6. 対戦者のどちらかが負けを認めた場合、もしくは流血や戦意喪失によって審判が危険であると判断した場合に、その個人戦は敗戦とする。
7. 三試合中、二勝した学校を勝ちとする。だが、得点算出のため、二戦で勝敗が決しても三試合目は行われる。
8. 代表者三名のうち、対戦相手の組み合わせと順番は、くじ引きによって決定する。

色々あるルールの中で、最後のくじ引きが意外に厄介だった。
組み合わせによって、チームの勝敗が左右されるからだ。
例えば、マクベアー先輩はうちのチームで一番強く経験もあるため、相手チームの一番強い相手と当たったほうがステアのチーム勝率は上がる。
ティリアで言えば、未知数であるイルフォードかリンのどちらかを引き受けてもらいたい。
中央でくじを引いたマクベアー先輩たちが、一度ベンチに戻ってくる。
「どうだった？」
デュラント先輩が尋ねると、マクベアー先輩は小さく唸った。
「俺がルパートで、クロエがイルフォード、カイルがリンだ。今言った順番で、試合をする」
「そうか、マクベアーはルパートか……」
デュラント先輩が呟くと、クロエ先輩とカイルが真剣な顔で言った。
「大将相手でも、剣術戦に選ばれた者として頑張るわ」
「俺も負けるつもりはありません」
真っ直ぐな瞳の二人に、デュラント先輩が頷いた。
「そうだね。相手の手の内がわからなくても、最善を尽くすしかない。三人とも怪我をしないよう気をつけて」
微笑むデュラント先輩に対して、三人は力強く返事をした。

◇　◇　◇

そうして幕を開けた剣術戦。一試合目のマクベアー先輩とルパートの試合は、圧倒的な力の差を見せつけてマクベアー先輩が勝利した。
技量の差もあるが、これはマクベアー先輩が試合慣れしていることも大きかったかもしれない。対抗戦の初めの試合ということもあって、ルパートがすっかり会場の雰囲気にのまれてしまったのだ。体の強張りがとけきらないうちに、マクベアー先輩の剣がルパートを追い詰め、大して打ち合わないうちに自滅に近い形で試合は決着した。
「気持ち、わかるなぁ」
シリルは肩を落としてベンチに戻っていくルパートの背中を見つめ、気の毒そうな顔をした。
だよねぇ。これだけ大勢の観客がいて、なおかつ学校の名を背負っての戦いだ。緊張するのも当然だろう。
しかも、相手は剣術大会優勝の常連であるマクベアー先輩だもんな。委縮しないわけがない。
そのマクベアー先輩はというと、ベンチにどっかり座って唸った。
「うーむ。気持ちを作るまで、待ってやるべきだったかなぁ」
さすがマクベアー先輩、相手を気遣う余裕まである。

「マクベアー、対抗戦なんだから手加減はダメだよ」
デュラント先輩に釘を刺され、マクベアー先輩は「冗談だって」と笑った。
二試合目は、クロエ先輩とティリアの大将イルフォードだ。
ティリア側の生徒から、大声援が飛ぶ。大きくて鮮やかな染色を施された旗には、『イルフォードさま、がんばれ！』『イルフォードさま、かっこいい！』なんてことが書かれていた。
ルパートの時以上に熱のこもった声援で、イルフォードが相当人気者なのだと知る。
しかし、当のイルフォードはそんな声援など興味ないといった様子だ。
ふわっと辺りを見回して、俺に目を留めると、少しがっかりした顔になった。
ん？　なんだ？　何をそんなに……あ！　首のリボンを取ったからか！
俺は手を挙げて、手首に巻いたリボンを見せる。
さすがに首にリボンは恥ずかしくて取ったが、せっかくの厚意なので手首に巻き直したのだ。
それを見たイルフォードが嬉しそうに微笑むと、ティリアの生徒から失神でもしそうなくらいの黄色い悲鳴が上がった。
「ちょっと、イルフォード先輩！　和んでる場合じゃないですよ！　勝ってくださいね！」
ベンチにいるサイードが叫んで、イルフォードはコクリと頷いた。
やっぱり不思議な人だなぁ。戦うイメージなんてないけど、本当に噂通りに強いのだろうか。
ちょっぴり疑いつつ、始まった試合を見つめる。

クロエ先輩は細身の女子でありながら、振り下ろす剣はとても力強い。木の剣であっても、攻撃が当たれば革の防具の上からでも衝撃があるはずだ。
イルフォードはそのクロエ先輩の攻撃を、前に後ろに左右にと体を移動してすり抜ける。
動くたびに肩に留められた短いマントがひらめいて、華やかな剣舞を見ているみたいだ。
クロエ先輩の攻撃だって遅いわけじゃない。それを苦もなく避けられるということは、動体視力と反射神経がいいんだな。
それにしても、イルフォードは剣を避けるだけで、攻撃する気配がない。
やる気がないのか、それとも隙を窺っているのだろうか。
クロエ先輩の表情を見ると、自分の攻撃が当たらず向こうからも攻撃されないので、イラついているように見えた。それと同時に、だんだん剣さばきも荒くなっているのがわかる。
イルフォードが飄々とした様子だから、余計にムキになってしまうのだろう。
「くっ！」
クロエ先輩が、強引に剣を振り下ろす。
「あぁ、焦ったな……」
マクベアー先輩が渋い顔で呟いた瞬間、守りに徹していたイルフォードが、今までと違う動きを見せた。
避けると同時に前に足を踏み出し、剣をクロエ先輩に向かって突き出したのだ。クロエ先輩は

とっさに後ろに飛んだが、イルフォードの剣は体全体を使って前に伸びてくる。
気づけばクロエ先輩の着ている革の防具の、みぞおち辺りに剣が当てられていた。本物の剣だったら、致命傷を負う位置だ。
その瞬間、審判が「勝負あり」と手を挙げた。
ティリアの生徒たちが旗を振って大喜びする中、クロエ先輩とイルフォードは一礼してそれぞれのベンチに戻る。
クロエ先輩は悔しそうな顔で、俺たちに頭を下げた。
「すみません」
「いや、クロエはよくやった。最後少し冷静さを欠いたが、動きは悪くなかった」
マクベアー先輩の言葉を受け、クロエ先輩は俯いた。
「対峙しているのに、イルフォードはまるで私を見ていないみたいで……。相手にされていないと思ったら、冷静さを失ってしまいました」
「なぁに、一勝一敗で勝負としては面白くなったさ」
笑うマクベアー先輩にクロエ先輩は小さく頷いて、それからカイルに向き直った。
「カイル君、お願いね」
「任せてください」
そう言ったカイルの顔は、戦に赴く若武者のそれだった。

緊張と気合いの入り混じったカイルの背中を、俺は軽く叩く。
「いつものカイルで頑張って」
「ありがとうございます！　いってきます」
カイルは小さく息を吐いて微笑み、闘技場中央へ走っていく。
ティリア側を見ると、リンもちょうどベンチから出てくるところだった。
「よーし！　イル先輩に続いて勝つぞー！　イル先輩、見ててくださいね！」
リンは元気な声でそう言って、イルフォードに満面の笑みを向ける。
イルフォードは薄く微笑んでコクリと頷いただけだったが、リンは満足げな顔をした。
手に持った剣をブンブンと振り回し、気合い十分で中央へ歩いていく。
そんなリンの姿に、観客がどよめいた。
リンの両手に一本ずつ、短めの木製剣が握られていたからだ。
観客の反応に気がついたリンは、パフォーマンスのつもりなのか、器用に剣をくるくると回す。
その鮮やかな手さばきに、観客から歓声や拍手が起こった。
「あれって……双剣。二刀流ってことだよね？」
俺は驚いて、隣のシリルに尋ねる。シリルはリンから視線を外さず、俺の問いかけに頷いた。シリルも驚いているみたいだ。
「僕がドルガドの王立学校に通っていた時、学校で行われていたリン先輩の剣術の試合を見たこと

があるんだ。でも、その時は普通の長剣だったはずなんだけど……」
今回の剣術戦のルールは、木製の剣を使うというだけで、剣の形状や戦闘スタイルについては記されていない。つまり、双剣や大剣であっても問題ないということだ。
ただ、双剣は当然ながら長剣と扱い方が異なり、それ専用の高度な技術が必要になる。同じバランスで両手の剣を扱うのは難しいし、打ち合った時の衝撃に片手で耐えられるよう、握力や腕力もいる。長剣より短い分、間合いで劣ってしまう短所もあった。
それゆえ、大抵は実戦でも試合でも、長剣を使用する場合が多い。
リンは見た感じ小柄な女の子だけど、相手が長剣でも打ち負けない握力と腕力があるのだろうか。
「双剣は長剣に比べて短くて接近しないといけないうえに、片手で持つから威力も弱いのに……」
理解できないという顔のシリルに、マクベアー先輩は腕組みをしながら唸る。
「普通だったら使い物にならんだろうが、今回の対抗戦のルールを利用して、あえて双剣にしたのかもしれんな」
「どういうことですか？」
ピアーズ先輩の問いに、マクベアー先輩は口角を上げた。
「双剣の利点は、剣の小回りがきくことと、手数が多く出せることだ。威力はないが、急所や致命傷を与える箇所に剣が当たれば審判によって勝ちとなる」
俺は「なるほど」と頷きながらも、マクベアー先輩に疑問をぶつける。

立ち読みサンプル
はここまで

「でも、それってリスクが高くないですか？　急所に当てるには、かなり接近しないといけないですよね？」
「まぁな。身のこなしが相当俊敏で、剣の扱いが上手くなきゃできない作戦だ。でもあの自信ありげな顔を見ると、俺の読みも悪くなさそうだろう？」
マクベアー先輩の言う通り、リンは剣を軽く振りながらどこか楽しそうにしていた。
俺はマクベアー先輩と同様に腕組みをし、祈る気持ちで闘技場中央にいるカイルを見つめる。
審判による開始の合図と同時に、カイルとリンは動き出した。
直後、木の剣のぶつかり合う高い音が闘技場に響く。
カイルが速攻を仕掛け、リンは二本の剣でそれを受け止めたのだ。
剣に力を込めながら、リンは大きく目を見開いていた。ティリアのベンチも、リンと同じくらい驚愕しているみたいだ。
それだけでなく、ドルガドやティリアの観客からも驚きの声が上がっていた。
ふっふっふ。皆、カイルの速さに驚いてるな。
俺は腕組みをしたまま、我がことのように、にんまりと笑う。
カイルのあの攻撃を防いだのだから、リンの反射神経も大したものだと思う。
でも、俊敏さに秀でているのが自分だけだと思ってもらったら困る。
うちのカイルだって、ステアの代表メンバーの中で一番の素早さだ。